



学薬のひろば



<新年号>

Vol. 026

新年明けましておめでとうございます。

学薬会員の皆様には、お健やかに新年を迎えられたことお慶び申し上げます。

役員一同、本年も学薬活動の充実に取り組んで行く所存でございます故、ご支援の程、宜しく願い申し上げます。

昨年は名古屋市の青山 茂先生が文部科学大臣表彰を受賞されるとともに11月10日の第55回全国学校薬剤師大会では愛知県からは写真右より一人おいて岩佐文恵先生（名古屋市）、森 英子先生・都築育子先生・岩井てる子先生（以上、愛知県）の4名の方に感謝状が贈呈されました。ここに改めてお慶び申し上げます。

さて、中央教育審議会の「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」における審議の状況が、平成17年7月27日に発表され、その中で「医薬品の有効性や副作用を理解し、正しく医薬品を使うことができる」ようにすることが検討されているとの報告がされたことはご承知のことと思います。愛知県では昨年初めより小中学生対象の「くすりの正しい使い方」CD及び解説書を配布、学校での活用をお願いしているところです。この取り組みは学校保健委員会等での講話、学級活動としての取り組み（例：1年 セルフディフェンス、2年 くすりと乱用薬物（くすりの正しい使い方）、3年 薬物乱用防止）及び総合学習の課題等として薬剤師が活用できることを願って作成したのですが、保健主事・養護教諭といった保健担当者が保健学習等で利用していただいても結構だと考えています。先生方より学校に推薦していただき、資料としてご活用いただくようお願いできれば幸いです。



平成17年度 学校環境衛生・薬事衛生研究協議会報告

【第一日目 全体会】

名古屋市学校薬剤師会 山口 一丸

今年度の本協議会は、11月1～2日に愛媛県松山市にて開催された。文部科学省をはじめ、愛媛県・松山市教育委員会、(財)日本学校保健会、日本学校薬剤師会等が主催するもので、平日にもかかわらず全国から500人をこえる参加があった。参加対象者としては、教育委員会の学校保健担当、学校の教職員、学校医、学校歯科医そして学校薬剤師であって、二日間に渡り開催され、一日目が全体会、二日目が部会別分科会（研究協議）という日程であった。本編では、第一日目の全体会について報告する。全体会は、文部科学大臣の挨拶から始まり、(財)日本学校保健会会長、日本学校薬剤師会会長の挨拶と続いた。いずれの挨拶も、児童・生徒を守る側としての話があり、学校内の環境衛生検査の充実、喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育の課題を指摘するものであった。



引き続いての講義は3題。講義1は「学校における喫煙、飲酒、薬物乱用防止に関する指導」という題目で、文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課の鬼頭英明先生が210枚という膨大な数のスライドを用いて講義された。内容で注目すべきは、まず児童・生徒の意識調査であろう。ここでは薬物に対する認識の不足として、ファッション感覚、やせ薬、隠語、安価、甘い勧誘そして携帯電話の普及というような問題点があげられた。また、「他人に迷惑をかけていないので使うかどうかは個人の自由」と思っている児童・生徒が小学校5年生で3%、そこから年々増加し高校3年生ではなんと15%に達するという恐ろしい現状も報告された。最近、若者の間で急激に広まって大問題となっているMDMAに関する報告もあった。最後は薬物乱用防止教育についての内容で、今後も児童・生徒に継続した教育の必要性を講義された。愛知県および名古屋市学校薬剤師会もこれに従って活動を進めて生きたい。

講義2は「学校環境における衛生動物—アレルゲンとなるダニの話」という題目で、松山東雲女子大学教授の石川和男先生が講義された。ダニアレルゲンの検査は昨年から追加された検査項目である。今回はそのダニについてかなり詳しく説明をされた。アレルゲンとしての内容というよりも、ダニそのものについての内容であり生物学を思い出させていただいた。

次は特別講演と題して「化学物質を安全に使うには」というタイトルで、愛媛県環境創造センター所長の立川涼先生が講義された。人工化学物質の毒性についての内容で、かなり興味深いものであった。主に取り上げられた化学物質はDDTをはじめ、PCB（カネミ油症）、ダイオキシン、フロンであった。人工化学物質は従来想定していなかった毒性を持つ危険性があり、その問題はエンドレスであるという。また環境ホルモンにも触れ、今後人類全体における問題になりうることも示唆された。以上、第一日は多数の参加者の中、メインホールでおこなわれ盛大なものであった。

【第二日目 部会別分科会】

愛知県学校薬剤師会 杉本 匡

第2日目は部会別に愛媛県県民文化会館内4ヶ所に分かれて開催され、我々は学校保健委員会・学校環境部会にて受講をしました。

◇ 研究主題：学校保健委員会活動を通じた学校環境衛生の活性化 ◇

上記主題に沿って以下2名による研究発表が行なわれました。

深見真弓氏は今年2月に行われた愛知県学校薬剤師講習会において下記研究発表をされました。その実践内容の素晴らしさを全国にも知らせたいという愛知県からの強い推薦を経て、今回の研究発表となりました。

研究テーマ1：

『教育活動としての学校環境衛生検査を目指して
～長期的実践からみえてくるもの～』

愛知県立豊田北高等学校

養護教諭 深見 真弓 氏

学校環境衛生活動は学校環境を整備するための管理面と、教育活動としての面を併せ持ち、「児童生徒が身の回りの環境に気を配り、これを自ら改善していくことのできる態度や習慣を養う教育活動としての学校環境衛生活動」が重要になるとの考えのもと、学校環境衛生検査を生徒保健委員会の活動として位置付け「教育活動としての学校環境衛生検査」を柱に16年間の継続的实践について発表されました。

学校環境衛生検査の実施に伴うプロセスが非常に詳細に定められており、検査計画の際には各年新しい着眼点・変更点を加えることで生徒が意欲的に検査に取り組めるような工夫をし、また検査結果については「保健だより」等で全校生徒に広報することで学校全体に意識を持たせる。学校保健委員会には三師はもちろんのこと、学校の金庫番である事務長にも出席してもらい、検査結果が不適になった場合でも速やかに改善し、事後措置を行うことができている。毎年新しい着眼点を持つことの困難さや保護者との連携等の今後の課題は多々あるが、環境について考え行動できる力は「生きる力」ととらえて学校に関係する人々との連携を密にし、今後も継続的に行っていくとの報告でした。



研究テーマ2：『宇和島市における養護教員の学校薬剤師に対する意識調査』

愛媛県学校薬剤師会 理事 井上 貴博 氏

宇和島市薬剤師会では学校の養護教員と学校薬剤師との間に隔たりがあるとの考えのもと、養護教員に対して「学校薬剤師の実態」と「養護教員の意識」のアンケート調査を実施し、その結果と今後の展望について発表されました。

学校薬剤師には地域差はあるものの、訪問回数の少なさや養護教諭に対する学校薬剤師の仕事内容の認識不足が判明した反面、学校薬剤師に相談することで解決し、その存在が大きなものであると養護教諭に感じてもらっているとの認識をすることもできた。宇和島市では今後本アンケート結果をきっかけに、切磋琢磨して知識を向上させ、PTAや学校医等との連携、行政とのパイプの強化をして地域への貢献をしていく。今回のアンケートがようやく学校薬剤師として活動する一歩になったとの報告でした。

上記発表に対する質疑応答が行なわれた後、主題に沿った様々な研究協議が行われました。

最後に岡山県教育庁保健体育課・総括参事の坂根清貴氏、日本学校薬剤師会・会長の杉下順一郎氏の指導助言を受け、全日程を終了しました。

第55回 全国学校保健研究大会報告

名古屋市学校薬剤師会 水野 勉

平成17年11月10日（木）・11日（金）に上記研究大会が天津市 琵琶湖ホテルにて開催されたのでこれに参加し、記念講演を聴講したので報告します。

全国学校保健研究大会・全体会記念講演

「学校健康教育への期待と役割」 兵庫教育大学副学長 勝 野 眞 吾

米国に於ける青少年の危険行動の死因は車の事故、その他の事故、自殺、他殺この4項目で72%をしめる。5~24歳では望まれない妊娠、エイズ、薬物乱用の順に多く、25歳以上での死因は心臓病、癌、脳卒中で70%を超えている。日本での死因は車の事故、他殺、自殺で60%を占めている。

青少年の6つの危険行動

故意又は不慮の事故

タバコ

薬物乱用

性行動、HIV、望まれぬ妊娠

不健康な食生活

運動不足

これらには相互に関連性が強く青年期に確立され大人になるに連れて固定化し、進行する。

タバコを吸う人は95%飲酒もしている。又喧嘩をすることが多い。吸い初めは14~15歳が最も多くこの時期にタバコを止めさせることが重要タバコを吸う人にはパートナーが4人以上の性行動が多い。日本での薬物乱用を初めるのは13~14歳が多く、この危険年齢を健全に通過させることが重要である。

食生活と運動不足からくる動脈硬化（心臓、脳、足等の血栓）は20歳前から始まっているので青年期が大切である。10歳台では元に戻すことが出来るが20歳以後は不可逆となる。日本の子供の食品はバランスの良い食品を摂っている。日本人はコレステロールは卵から多くを摂り高脂血漿は米国と比べて少ない。米国では肉、牛乳、卵等の飽和脂肪を多く摂るので動脈硬化が多い。日本の女子はヘモグロビン値が低く明らかに貧血が多い。白人に貧血は殆ど無い。学校は健康な子供を対象に出来る。子供の発達段階に対応した系統的な働きかけができる。教育に必要な機能、要素をそなえている。従って健康教育は学校で実施することが最適である。

健康教育・学校保健に求められるものは包括的な健康教育科学的な根拠に基づくこと

新しい手法が必要：ライフスキル教育

評価とフィードバックが求められる。学校、家庭、地域の連携と共同作業が必要。

このような点を踏まえて一次予防の視点が重要である。

危険行動に関わる要因としてはまずは動機がある。（態度、信念）

セルフエスチームがあるかどうか。寂しさが原因となることもある。

ライフスキルがしっかりしていると危険行動には至らない。それが無いと繰り返し繰り返し危険行動をとり、そして深みにはまる。バランスの良い健康教育が必要であり、これにより危険年齢を乗りこえることが出来る。

第55回 全国学校薬剤師大会

平成17年11月10日(木)学校保健研究大会全体会終了後、琶湖ホテルにて第55回全国学校薬剤師大会が開催された。杉下日本学校薬剤師会会長の挨拶の後、表彰式がおこなわれ愛知県(名古屋市を含む)からは4名の養護教諭の先生方に感謝状が贈られた。

特別講演は「子供の脳の発達と教育」と題して洛和会京都医療介護研究所 神経病理研究センター所長 田中順一先生が講演された。

その後、懇親会にうつり各県の参加者との歓談を通して交流を深め合った。



第55回全国学校保健研究大会 2日目第8課題 報告

「快適な学校環境づくりを目指す学校環境衛生活動の進め方」に出席して

愛知県学校薬剤師会理事 浅井彦治

当課題の内容は趣旨説明から、研究発表を3課題発表、コーディネーターの指導助言、講義という内容で進められた。

研究発表は以下の3題であった。

①子ども達と共に取り組んだ「水調べ」

(大阪府吹田市立南山田小学校 学校薬剤師 山口 誠先生と、研究課題担当した松岡光一教諭)

②安全な学校環境づくりをめざして「新基準」にもとづく環境衛生データターの活用

(愛知県小牧市立北里中学校 養護教諭 児玉和江先生)

③自ら学び行動することも育てる学校薬剤師活動

(滋賀県大津市富士見小学校 学校薬剤師 小幡恵子先生)

指導助言としては「快適な学校環境づくりをめざす学校環境衛生活動の進め方」(茨城県教育庁保健体育課 学校保健担当主査 高村浩亮先生) 講義は「学校環境衛生活動の進め方〜化学物質の安全管理・教育」(岐阜薬科大学教授 永瀬久光先生)と題して行われた。

研究課題は小中学校の教諭・学校薬剤師・養護教諭等の発表により基礎的な研究内容から得られるデータから児童生徒への科学的な興味を引く内容となり、同時に学校環境の提言を示唆するものともなった。

指導助言に至っては学校環境衛生活動の進め方からのものとなった。

永瀬教授による環境基準に対する考え方(環境リスク=各々の有害リスク×取込む量)は今後の学校環境を考える上で、設備・経費他色々な問題のある現場に照らし合わせて見る時、参考になるものであった。

最後に昨今薬局薬剤師を取りまく多忙な環境の中、全国に多くの活躍している学校薬剤師がいる事に今回の大会で再確認できた事は非常に心強いものであった。医薬分業の進展が進む中、過渡期とは言え開局薬剤師の国から付託された社会的責任の必要性を考える時、少し偏っている点(店舗を離れにくく学校等へ行く時間が取れにくい等々)は現状を考察する上で不可欠に思われた。

